

「勘定奉行萩原重秀の生涯」 著者：村井 淳志（むらい あつし）

今から遡ることおよそ360年前。江戸に大きな経済転換期が訪れた。時は元禄、幕府は財政危機に陥っていたのである。百万都市となった江戸中に流通する貨幣の量が需要に追い付かず経済が停滞し、デフレ危機にあった。その時江戸の経済を根本から変えてしまう天才役人が現れたのである。勘定奉行萩原重秀である。

その手法は、貨幣改鋳を実行することであった。慶長小判（純金84%）を回収し、元禄小判（純金56%）に改鋳した結果、その差額500万両が幕府の懐に入ったのである。富裕層がため込んだ慶長小判を供出させ、代わりに改鋳小判を同価値として保証し提供したのである。改鋳は富裕層に対する貯蓄課税の効果でもあった。

批判もあったが「貨幣は国家が造るところ、瓦礫をもってこれに代えるといえどもまさに行うべし。今、鋳するところの銅銭、悪薄といえどもなお、紙鈔に勝る。これ遂行すべし」との言葉を残して実行している。これはまさに名目貨幣の考え方であり、これにより幕府の財政危機を救ったのである。

しかし、幕政改革の鬼と呼ばれた儒学者である新井白石が立ちふさがったのである。白石は将軍家宣の時に要職につき、3度にわたる家宣へ弾劾書を提出し、勘定奉行萩原重秀を解任に追い込んだのである。家宣の死の直前（1カ月前）で体調が思わしくない状況の中で3度目の弾劾書を聞き入れたのである。

白石の著作である「折りたく柴の記」で繰り返し重秀の悪行を述べている。その口調は常軌を逸しているほどであった。

また現代歴史学、歴史文学においても評価が正反対に分かれる人物である。しかし絶対的な資料不足ゆえ謎の多い人物であるとしている。そんな中で、歴史小説家の堺屋太一の「峠の群像」での萩原重秀の評がある。

「経済を理解し政策として考える才能を有し、17世紀の末にこうした考え方の持ち主が現れたのは誠に驚異的であり、当時の西洋の経済学に比べても数等進んでいる」などと高い評価をしている。

筆者の村井淳志氏は、金沢大学教育学部教授で専門は歴史教育・社会科教育論である。

村井氏は、現存する様々な幕府の公式記録や当時の写本を徹底的に探査し、細微な事実を積み上げていくことで、これまで見えなかった萩原重秀像を構築していったのである。根気のいる作業であったとしている。

重秀の経済政策は、これまでの官僚の政策が、旧来の手法に従って行うのとは異なり大胆かつ繊細・緻密である。まず最初の主な事業として、佐渡奉行を兼務した重秀は、当時生産量が落ち込んでいた佐渡金山の再生に取り組んだのである。現地にて金山を調査した結果、11万3千両を投資し、坑内に溜まった地下水を排出するための排水溝を掘削した結果、新たな鉱脈を発見し、金山の生産量が回復したのである。

これだけで事業を完了させるのではなく、佐渡で初めての実測検地を実施したのである。検地の結果、以前の収穫量2万3千石に対し4万1千石と80%増加が判明したのである。

さらに重秀が経済官僚として優れているのが、年貢と鉱山経営を同一会計処理をすることによって、佐渡金山に投入される資金を補填しようとしたのである。

次に前段で述べた貨幣改鋳事業である。佐渡金山は一時的に回復したが、先が見えていたのである。そのため、日本貨幣史上初の大規模な貨幣改鋳事業に取り組んだのである。その考え方は貨幣論という「実物貨幣」から「名目貨幣」への第一歩をしるすものであった。なぜ名目貨幣の考えに気づくことができたのか、それは日本が鎖国をしていて、比較的早く、金鉱フロンティアの枯渇に直面したからである。閉鎖経済だったからこそ政府による名目貨幣の強制通用が可能だったとしている。（海外諸国との交易では日本の名目貨幣は通用しないからである。）しかも萩原は勘定吟味役と佐渡奉行を兼務したことなどから、実物貨幣の限界をいち早く察知させたのだろうと考察している。

改鋳事業を批判するほとんどの文献では、この改鋳で「物価が高騰した」と述べているが、検証した結果元禄8年改鋳に伴う物価上昇率は年率3%であった。元禄8・9年の深刻な冷夏による米価の急騰、元禄16年の元禄大地震の影響の方が高いと考えられる。こうした考察を経ないで改鋳＝物価高騰と短絡させてしまうのは、大変危険であるとしている。

その後も、重秀は幕府の財政難に対して数々の経済政策に取り組んだのである。長崎貿易の改革、元禄の地方直し、東大寺殿再建など幕府の要求に財政面で応えていったのである。また元禄大地震、宝永大地震、富士山宝永大噴火など大災害が続く幕府財政にとって大打撃であった。江戸城郭や大名屋敷破損への修復、橋梁や堤防の補修などに莫大な費用が必要であった。幕府は例によって、重秀に「こたび各所修築の事沙汰すべし」と命じた。そして、重秀は様々な財政策をとり、性急な対策では、再度の改鋳にも取り組み、切り抜けたのである。

一方、新井白石は、性急な改鋳作業によりインフレを招いたとし、さらに不正による悪行など3度にわたる罷免要求を繰り返し、ついに重秀を勘定奉行の座から無理矢理引きずりおろしたのである。

しかし白石は、なぜそこまでして重秀を敵視したのだろうか。儒学者であるはずの白石は、重秀に対するときは激しく、常軌を逸した執念深さであった。

勘定奉行を辞めさせられた重秀は、その後、歴史から消える。罷免した翌年、病死とも自害とも言われているが、真相は分かっていないのである。